かくて更に一歩を進め、ジアンフウを泉州に比定せざるを得ぬことを論じたものである。

顧ふに、本書小傳に記せる如く、博士は我國東洋史學の先覺であつて、那珂、白鳥博士と其の名を齊しくする。其の考證論斷の周到精確であつて、片言隻句も苟しくしないことは、夙に一般の認むるところ。本書の如きは、單に西域、東西交通に對する其の蘊蓄を知り得るのみならず、其の着實なる學風と該博なる知識を最もよく窺ひ得るものであらう。

猶、本書には矢野博士の序文があり、別に卷頭には小傳と著作年表及び卷末には索引を附して居る。これらのものゝ讀者に益するところ、亦尠しとしない。記して編者の勞を謝する。本書に繼ぎて、文化史に關するもの、法制史に關するものゝ出版を企てつゝとありと聞及んでゐる。斯學の爲、發行の一日も早からんことを鶴首して待つ次第である。（弘文堂發行、定價三・八〇）〔小野勝年〕

●ドーソン蒙古史

田中萃一郎譯

歐洲の東洋學者は十八世紀末期十九世紀の前期に於て既に充分實證主義的な史觀を受入れて居たが爲に、十八世紀前期のそれが多分に東洋に對する理想的な憧憬を持つ愛好家の色彩を有つてゐたのと對蹠的存在をなして居る。從つて十九世紀の東洋學者の一般は先づ東洋語殊に支那語の征服より自由なる支那史料の解讀に進み支那史研究に劃期的の飛躍をなしたのである。

乍然、彼等の一部が困難な支那語の習得を避け、寧ろ彼等の利用し得る僅少な歐譯支那史料を補つて餘ある多數の西方文獻の殘存する方面即ち匈奴族或は蒙古族等歐洲にも最も深い關係を有する東方蠻族の歴史的研究にと突進し、こゝに多くの輝しき業績を殘し得たのであることも忘れてはならない。ドーソンも亦實に其後者の一人であり、又其一人者と言ふことが出來よう。

ドーソン蒙古史即ちドーソン男爵が一八二四年巴里に第一部を發表し、五二年稿を改めて其全四部を公刊した原著 Histoine des Mongols, depuis Tchinguiz-Khan jusqu'à Timour Bey ou Tamerlan 並に明治四十年出版せられた原著第一部に對する田中博士の譯本は餘りにも有名であるから、今般同博士歿後十周年に當り遺草たる第二部の譯稿が三田史學會によつて整理せられ第一部と纏めて茲に新刊せられたに就ても、別に內容紹介の言を管々しく縷述する迄もないが其內容を一言にして謂へば第一部は成吉思汗及び其父祖等の事蹟である。讀者は勁悍粗野なる彼等の原始的漂泊生活を如實に觀ることが出る、且つ民族新興の雰圍氣と將に吹き荒まんとするアジアの嵐を感ずることが出來る。第二部には歐亞に於ける慘憺たる大侵掠大殺戮と絢爛たる蒙古帝王紀とを見る、即ち之は太宗期より元末に至る詳史である。兩部ともに興味深き幾多の挿話に富んでゐて、成吉思汗傳其他蒙古史に就て可なりの人士すら尙荒踏無稽の說を信ずる者の尠くない今日、專門史家以外の人々にも好個の讀物として本書を推稱したい。

勿論前世紀の著作たる本書が現代吾人の求むる如き歴史の性質を完全に有するものでないことは確である。餘りも多數の歴史的事件の羅列が吾人をして却つて其時代全體の把握を妨げてゐる、例へば蒙古將校の基督教侮辱の事件の頁を經る其の次頁には忽ち蒙古朝廷に於ける基督教信仰の事件が何等連絡なく擧げられて、其處に少しの説明も與へられて居ないのである。本書の價値は言ふ迄もなく寧ろ其史料として吾人が利用し得る上にある。原著が多數のシリヤ、アラビヤ、波斯・土耳古語等の稀覯古文書を縱横に驅使した博引傍證の點にある。其歴史事件に對する緻密正確な考證の所以は前述の彼自身の時代及原著の序文に見ゆる處よりしても容易に了解できる。田中博士の譯本も既に定評ある飜譯で其に加へて文中の固有名詞の殆總てに支那史籍と同一の漢字を當て嵌めた點に於て優れるものである。從來我國の蒙古史研究に原著と譯本が必ず並用されて元史と共に其諸史料の根幹とする風のあるのも全く其が爲であつて、今新に第二部が譯出され、加之譯本のみに對する索引が作られて卷末に附せられたことは實に有意義なこと、言はればならぬ。それにつけても支那史料の僅少なる汗國に關して、詳細なる記述をなして居る原著第三・第四部の飜譯が何人かの手によつて一日も早く出刊せられることが望ましい。（七三四頁、價六・〇〇、丸善發賣）〔内田〕

◉市村博士古稀記念　東洋史論叢

東洋史學界の長老市村博士が古稀に達せられた祝賀論集である。還暦記念論集は白鳥博士のを始め多數出たが、古稀記念は此を以て嚆矢とする。先に大正十四年白鳥博士の還暦記念論叢には執筆者二十五名を數へ、八年後の今日では何れも推しも推されもせぬ大家として學界に重きをなして居られるが、今回のでは約二倍に近い四十四名に達し、舊に比〻更に二十數名の新進を加へたわけである。市村博士の壽と共に祝福さる可き學界の慶事であらう。されば本書の紹介に當りても主に新寄稿者を中心として筆を執る事とする。

第一に氣のつくは法制・經濟に關するものが多い。加藤繁博士『唐宋時代の草市及び其の發展』青山定男氏『北宋の漕運法に就て』濱口重國氏『秦漢時代の徭役勞働に關する一問題』三島一氏『唐宋時代に於る貴族對寺院の經濟的交渉に關する一考察』仁井田陞氏『唐宋時代の家族共産と遺言法』牧野巽氏『永樂大典本宋吏部條法に就て』清水泰次氏『明末の軍餉』などがそれである。而して唐宋時代が特に多い理由は敦煌發見の古文書などに刺戟されたせいもあらうが、又宋代は支那に於る近世的社會形態が出來上つた時であり、その淵源を尋ねるとどうしても唐代まで遡る必要がある爲ではなからうか。

第二には朝鮮關係のものが多い。稻葉岩吉博士『高麗圖經を讀みて』奥平昌洪氏『朝鮮通寶錢考』孫晋泰氏『長生考』島山喜一氏『鮮民白衣考』中村榮孝氏『李朝時代の耆老所に就いて』李丙燾氏『所謂箕子八條教に就て』などがこれである。朝鮮に京城大學